

## 8 糖尿病網膜症の血管閉塞は硝子体手術で回復する?

安藤 伸朗・根本 大志 ( 済生会新潟第二病院 )  
佐々木 亮 ( 眼科 )

【目的】糖尿病網膜症は、新生血管が生じて増殖網膜症に進行すると、失明の危険性が高くなる。新生血管発生には、網膜毛細血管の閉塞が関与している。そこで網膜毛細血管の閉塞を改善することが出来れば、網膜症による失明を防ぐことが出来る。

【対象】'99年4月から'01年6月までに、済生会新潟第二病院眼科で糖尿病網膜症に対して硝子体手術109例142眼中、術前後の蛍光眼底所見の観察可能な18例21眼。

【結果】手術した21眼で術後血管閉塞が減少7眼(33%)、不変9眼(43%)、増加5眼(24%)。手術未施行15眼では、減少0眼、不変10眼(67%)、増加5眼(33%)。手術眼では有意に血管閉塞領域が、術後に減少していた。

【結論】糖尿病網膜症に対する硝子体手術は、血管閉塞を改善させる効果も期待出来る。今後さらに症例数を重ねて、検討する必要があるが、網膜血管閉塞に対する新しい治療法開発の糸口となることを期待している。

## 9 当院糖尿病クリニック2年の歩み

浮須 潤子・佐々木英夫  
小林 千晶・鈴木亜希子  
佐野 和江・石井 幸子  
池田由美子・長谷川美代 ( 新潟こぼり病院 )

平成12年5月に当院糖尿病外来発足後2年が経過し、外来患者数は150人から512人まで増加し、平成12年10月には友の会が発足(会員43名)、定期的に試食会やウォークラリーも行っている。当院の糖尿病外来は、採血・採尿→看護外来→医師の診療(当日の検査結果をもとに)→栄養指導という流れになっており、治療の核となる栄養指導は入院中は最低でも2回は指導が入り退院後も引き続き外来日に行っている。HbA1cは7.27±1.10%から6.53±1.08%まで改善したが、コ・メディカルの協力もあり受診日の時間を有効に利用して

啓蒙及び指導が行える環境が治療成果に大きく貢献していると考えられる。

## 10 当院の糖尿病診療における診療連携

中村 宏志・中村 隆志 ( 中村 医院 )  
東山治花子・坂井 美恵 ( 内科 )  
井上 圓 ( 新潟薬科大学 )  
中村 隆志 ( 薬理学教室 )  
佐藤 朋子・渡辺満里子 ( 吉田町保健セ )  
 ( ター )  
坂井 豊明 ( 坂井眼科医院 )  
 ( 眼科 )  
阿部 道行 ( 県立吉田病院 )  
 ( 内科 )

【当院で治療中の糖尿病の診療連携】最近3年間当院患者で病院へ診療を依頼した者(血糖コントロール、合併症の治療など)は40名で、うち32名は返事をいただいた後当院に再び通院している。糖尿病診療に関して、他の医療機関から12名当院へ診療を依頼された。他の医療機関へ転医したいと希望した者が17名おり、いずれも紹介した。眼合併症に関しては、当院で治療中の糖尿病患者全員に眼科受診をすすめ、うち80%は坂井眼科医院に依頼している。腎症に関しては、当院から血液透析を依頼した者は4名であった。行政(自治体)とは、栄養指導依頼、住民健診との診療情報交換、糖尿病教室の講師、耐糖能障害者個別指導への協力などを通じて連携している。

【他の医療機関で治療中の糖尿病の診療連携】他の医療機関で治療されている糖尿病患者(当院には糖尿病以外の疾患で通院中)について、出来る範囲で患者教育・主治医への診療情報提供などでコントロールの改善、眼科受診のすすめ、などを行っている。

## 11 栄養・看護外来に対する患者の認識と要望 —アンケートを実施して—

石井 幸子・佐野 和江  
池田由美子・長谷川美代  
浮須 潤子・佐々木英夫 ( 新潟こぼり病院 )

当院では平成12年5月より糖尿病センターを開

設し、同時に栄養・看護外来を発足した。

発足後1年半がたち、栄養・看護外来が患者にどのように受け止められているか、今後の指標を知るためにアンケートを行った。

その結果から、病気に対する取り組みが変わった患者も多く、HbA1cの平均値が7.41%から6.52%へ改善している。

センター開設当時は、看護師・栄養士がお互いの分野の知識が不足だったが、現在はCDEの勉強会に出席したり、お互いに情報交換をし、知識の取得に努力している。

しかし、患者のもっている問題はなお多種多様であり、そのような場面においても適切な指導が行えるように、私達も技術の向上に今後も努めていきたい。

## 12 糖尿病患者への心理的援助

### —グループワークを試みて—

佐藤 文江 (刈羽郡総合病院  
精神科心理室)  
内山 洋子 (同 栄養科)  
片桐 尚・涌井 一郎 (同 内科)

糖尿病患者への心理的援助として、当院で1年半前から行なっているグループワークについて報告した。

【グループワークの概要】対象は入院中の患者。スタッフは臨床心理士と栄養士。目的は「病気や療養生活をめぐる気持ちを患者同士が互いに話し、気持ちの整理をし、糖尿病へのより良い適応ができるよう援助すること」。患者は互いに話し聴き、スタッフは基本的には傾聴する。

【症例を通して】入院時、反発や不満が強かった1症例の、2回の参加の経過を通して、グループワークの機能や、心理的観点からの患者理解と対応の実際を示した。

【まとめと今後に向けて】血糖コントロールの不良と感情表現の困難さとの関係を指摘する報告があるが、当院のグループワークでもその印象があった。反発の形でも感情表現のできる人は態度やコントロールに改善が見られることがあるが、改善困難例では感情表現が少ないことがあった。

後者への援助の工夫が今後の課題と考える。

## 13 栄養看護外来での新たな取り組み

### —体重記録のグラフ化の試み—

小板 恵子・桜井 優子  
内山 洋子・高野 暁子 (刈羽郡総合病院)  
小出 ふみ (栄養科)  
藤林みどり (同 看護科)  
片桐 尚・佐藤 高久  
涌井 一郎・小林 敷 (同 内科)

【目的】肥満から糖尿病を合併し、教育入院の困難な患者さんを対象に体重記録を行い、グラフ化することで自発的な行動の変容を患者さんから引き出すことを目的に外来で継続指導する。

【対象症例】男性26名、女性15名、合計41名。平均年齢54歳。

【方法】①24時間の生活状況を聞き取る。②朝(排尿後)夜(就寝前)に体重測定を行う。可能であれば食事記録又は運動記録も行う。③記録をグラフ化して、食生活状況、活動量が体重の増減に影響することを視覚的に認識してもらう。

【結果】体重減量成功例14%、体重減量継続例48%、体重減量中断例38%。

患者さんが、体重・運動の記録をし、栄養士がグラフ化することで問題点が視覚的に認識できる。こちらが問題点を指摘するよりも「気づかせる」というような指導方法が患者さんの主体性を引き出したのではないかと考えられる。

## 14 『糖尿病ビジネス』の実態と対策

中村 宏志・中村 隆志 (中村医院内科)  
中村 隆志 (新潟薬科大学  
薬理学教室)

『糖尿病ビジネス』とは、糖尿病に関して現在行われている治療法を否定し、科学的根拠のない治療法を患者にすすめ、利益(金銭、感謝、名誉、視聴率)を得ようとするものである。具体的には、健康食品、健康器具、テレビ番組、出版物、などがある。内容は多岐にわたっており、患者の治療に大きな影響を与える場合も多い。医療関係者はこ